



長田円右衛門の碑(甲府市高成町)

長田 1795-1856

おさだ えんえもん

長田 円右衛門



日本の滝100選のひとつ「仙娥滝」

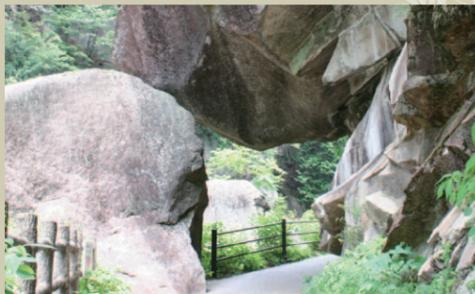
御岳昇仙峡

円右衛門が世に広めた名勝

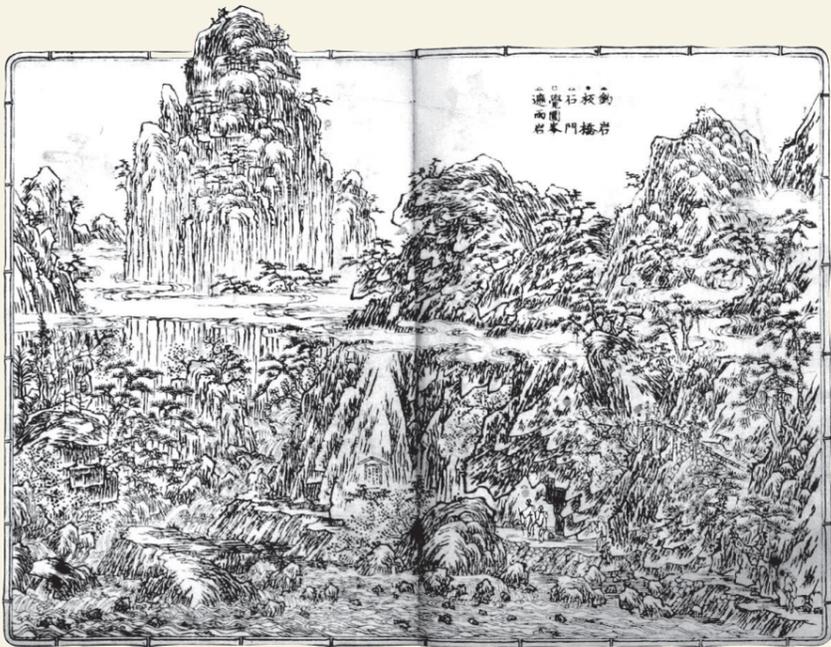
秩父多摩甲斐国立公園内にある国の特別名勝。長潭橋から仙娥滝までの約4kmに及び渓谷には、急流に削り取られた花こう岩の断崖がそびえ立ち、四季折々の美しい姿を見せる。



左のとがった岩が「覚円峰」、右の岩が「天狗岩」



新道開削工事でできた奇勝「石門」



「仙嶽關路図」左上にそびえるのが覚円峰、右下の2人の旅人が歩いている所が石門。(竹邨三陽 画) 多くの奇岩が連なり、低く荒川の溪流が見える。

県立博物館 かいじあむ

「山梨の自然と人」をテーマにした参加体験・交流型の博物館。御岳新道開削に関する資料も展示している。



県立博物館 笛吹市御坂町成田1501-1

TEL 055-261-2631 かいじあむ



「猪狩村新道切開御寄付御連名帳」連名帳に記された円右衛門の自筆と印

御岳新道を切り開き 昇仙峡を世に出す

独特の渓谷美を誇る御岳昇仙峡が観光地となったのは、江戸時代後期のこと。荒川上流にあった猪狩村の長田円右衛門が渓谷沿いに新道を開削し、その景観の美しさを世に送り出したことが始まりであった。

誰もが望んだ新道 その開削に挑戦

円右衛門が暮らしていた猪狩村は荒川上流域の山間にあり、村人たちはまきや炭などを売りに行くのも、日用品の買い付けも、一日がかりで山を越えて甲府城下へ出て行かなければならなかった。

そこで百姓代の円右衛門が中心となり天保4(1833)年、川沿いに道を通す工事に乗り出した。猪狩村では過去2回、円右衛門の祖父らが新道開削に挑戦したが挫折。これが3度目の挑戦だった。

誰もが望んだ新道だったが、連なる大岩盤の開削という大工事。また巨額に上る資金の調達など、解決しなければならぬ問題は山積していた。

ようやく近隣の村からの賛同を得られたが、工事費の捻出に苦心した。新道完成後に猪狩村内で10カ年賦償還で出資することを申し合わせたものの、最初の工事費は円右衛門らが立て替えることとなり、自らの畑を質に入れて資金を調達した。

開削工事がもたらした 観光開発という新たな道

天保5(1834)年12月、つ

いに新道開削が始まった。猪狩村はもちろん、近隣の村も人足を出し、工事は順調に進むと思われた。しかし難工事が続き、沢伝いに開いた道は豪雨で流出。さらに天保の大飢饉などもあり中斷を余儀なくされた。

結局、新道開通までには足かけ9年の歳月を要したが、この工事は地域の人々の生活道路を開いただけでなく、思いがけない産物ももたらした。覚円峰や石門と並び昇仙峡の名勝である仙娥滝は、その存在は知られていなかったものの、山が険しく人が分け入れないため容易にはそれを見るのができなかった。新道開削により、仙娥滝直下の渓谷美が世に出、この地域の観光開発の礎となった。

新道を守り、渓谷美を世に送り出すことにささげた晩年

円右衛門は新道開通後、道沿いに「お助け小屋」と呼ばれる小屋を建て、通行する人にわらじ

を売り、湯茶で接待するなどした。

また新道の修理や保全に備えて資金調達を続け、当時の甲府大手勤番支配浅野梅堂をはじめ、徽典館の初代学頭友野霞舟や城下の有力商人など1300人を超える人々からの寄付を集めた。

天保14(1843)年には昇仙峡を訪れた文人が、円右衛門の依頼で雪虹瀑、沸玉泉、眩岩など、主な場所に命名。また、安政元(1854)年には、円右衛門と交遊のあった文人らが景勝地を描き、詩文を添えた「仙嶽關路図」が出版されるなど、昇仙峡は観光地として広く知られるようになった。

安政3(1856)年、円右衛門は63歳で亡くなった。平凡な農民が、39歳で新道開削に乗り出して以来、大きくその人生を変え、晩年は新道保全と渓谷の美しさを世に広めるために尽力した。まさに新道にささげた生涯であった。